

- なんで「あやし」が「田舎びて見苦しい」になるのかわかりません！

模範解答は「田舎びて見苦しい」になっていますが、「見苦しい」だけでOKです。「見苦しい」で不正解にしている人がたくさんいましたが正解で大丈夫です。

「あやし」は「不思議に思う感じ」がもともとの意味ですが、貴族たちからみて庶民の生活は不思議なものだったので、「身分が低い」「粗末だ」「みすばらしい」「見苦しい」というような意味でも使われるようになりました。今回は上総国という田舎で生まれ育った自分自身のことを筆者が自虐的に述べている部分なので、模範解答には「田舎びて」というフレーズが入っていました。

- 問3の「候ふ」なんですが謙譲語と、丁寧語を見分ける方法はなんですか。

今回は文脈で区別してください。「候ふ」には3つの意味があります。一つ目が謙譲語で「(偉い人)にお仕えする」という意味。二つ目が丁寧語で「ごぞいます(「あり」の丁寧語)」という意味。3つめが丁寧語の補助動詞(「書き候ふ」、「行き候ふ」のように動詞の連用形にくっついている)で「～ます」という意味です。今回は補助動詞ではない(直前が動詞の連用形ではない)ではないので、文脈で判断する必要があります。今回は「物語が(誰か偉い人)に仕えている」とは考えられないので、丁寧語と考えられます。

- どうして問四の1は上総国なんですか？
- 「なほ奥つ方に生い出でたる人」はどの部分を見たら分かりますか？

「あづまぢの果て」とは東へ行く道で京都から東に向かった果ては常陸国(現在の茨城県のあたり)です。その「あづまぢの果て」よりも「なほ奥つ方(さらに奥の方)」ですから上総国(現在の千葉県のあたり)がよいです。

これは実力で解いてほしい問題ではなく、教科書の注をみてわかってもらいたい問題です。本文中に根拠はありません。

現在の山口県民的な感覚からすると、千葉のあたりというところこそ都会なイメージがありますが、江戸時代より、さらに鎌倉時代よりも前に書かれた文章ですから、当時の感覚としては京都から大きく離れた田舎というイメージがあったということを知ってもらうための問題でした。

- 問2の④はじれったいでは×ですか？

「じれったい」も「もどかしい」もほとんど同じ意味の言葉なのでどちらでも OK です。

- 問4の2ですが地の文なら必ず作者になりますか？

必ず作者になるわけではありません。この作品が「日記」であることに注目してほしいと思います。日記文学では特に言及がなければ作者自身のことを書いていると考えてよいです。日記文学の特徴として、自分に起きた出来事をあたかも外からみているような書き方をすることがあるので注意してください。

- 問4の3は、「いかに一か」というように副詞の呼応してるのになぜ付け加える言葉が、連体形の「あらむ」になるんですか！？

注目すべきは「にか」という部分です。「～にか」「～にや」の「に」は断定の助動詞「なり」の連用形です。この「なり」の連用形の「に」は、必ず「に（～）あり」の形で使われます（敬語のときは尊敬語の「おはす」や丁寧語の「侍り」「候ふ」）。ですから「にか」のあとに「あり」が省略されていると考えることができます。今回は「いかに～か」で疑問の文脈ですから、さらに推量の「む」をつけて「あらむ」が正解になります。説明が長くなりましたが、「にか」「にや」は「にかあらむ」「にやあらむ」の省略形と覚えてしまった方がいいかもしれません。

- 問4の4の④は「どうにかして」ではなく、「なんとかして」でもいいですか？
- 「いかで」の訳し方の見分け方が分からない
- なぜ問4は答えのような訳になるのですか？

「どうにかして」は「なんとかして」でも OK です。

「いかで（か）」の訳しかたは3つあります。

- 1 【願望】 なんとかして～したい（しよう）

（文末が希望・願望の終助詞や意志の助動詞）

- 2 【疑問】 どうして～か

- 3 【反語】 どうして～か、いや～でない

④は「いかで見ばや」と希望の終助詞「ばや（～したい）」が使われているので、「なんとかして見たい」という訳になります。希望・願望の終助詞があったら必ず「なんとかして」と訳しましょう。

- 問4の⑤は副詞の呼応と係結びがありますが、どちらも使って現代語訳するんですか？それともどちらか一つですか？
- ⑤はどこが反語で訳さなければいけないところですか？

⑤のように文末が「む」のパターンが一番難しいです。形式上は願望・疑問・反語のどれも可能性があるからです。ですから文脈で判断する必要があります。

文脈としては…

・姉や継母からいろいろな物語の話を聞く

→心が引かれるけど…

→自分の思い通りに、「いかでか覚え語らむ」

→薬師仏に「早く京都に行って物語を全部見せてください」と祈る

「ゆかしさまされど」の「ど」から逆接。心が引かれたけど…うまくいかないという文脈が予想される。またそのあとの薬師仏への祈りから物語をはやく読んでみたいと思っていることがわかる。だとすれば、反語で訳するのが一番文脈に合っています。

姉や継母は京都にいたころに物語を読んだことはあっても、さすがに話の内容を全部覚えているわけではないので、作者の菅原孝標女が満足するほど語ってはくれなかったということです。

副詞の呼応に注目して訳しても係り結びで訳しても、意味がかぶっているなので、同じ訳になると思います。

- 問四の8がcになる理由が知りたいです！

古文の「の」が現代語の「が」のように主語を示す働きがあるのはよく知っていると思います。a、b、dは「が」と訳して問題ないですね。助詞の「の」について文法問題としていちばん問われるのはcの「同格」という意味です。同格とは「の」前後で同じものについて説明しているということです。いちばんよく見るのが「○○なる<sup>(連体形)</sup>名詞の、△△なる<sup>(連体形)</sup>」という形で、「○○な名詞で、△△な名詞」と訳します。「の」を「で」と訳して後半部分にも同じ名詞を入れるのがポイントです。たとえば、「かっこよき人のいつも厚狭駅から電車に乗りたる」という形なら「かっこよい人でいつも厚狭駅から電車に乗る人」となります。今回の文のcも同じ形で「日の入る頃で、(略)霧がたちこめている頃に」という訳になります。

● 問四の9がわかりません！

「こころもとなし」という単語は問二で確認したように「もどかしい・じれったい」という意味です。「こころもとなし」の「もと」は「～のもとへ行く」というときに使う「もと」で、心の行き場所がなく、落ち着かない様子をあらわす形容詞です。